

一般社団法人日本社会福祉学会

## 第72回秋季大会報告

第72回秋季大会 実行委員長 保正友子(日本福祉大学)

### 1. プログラム内容

2024年の日本社会福祉学会第72回秋季大会は、「現代における社会福祉の本質を探る」をテーマに、去る10月26日、27日に愛知県の東海市芸術劇場と日本福祉大学東海キャンパスで行われました。対面とオンデマンド配信の開催で、参加者は722人(うち中韓自由発表者5人含む)と、盛況のうちに終了しました。この場をお借りして、参加者、登壇者、理事、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。プログラム内容は以下のとおりです。

1日目午前中は東海キャンパスにてスタートアップ・シンポジウムを開催しました。「実践と研究の循環を考える」をテーマに、山野則子氏の司会のもと、3人の方(木佐貫悦子氏、松本大樹氏、山本綾子氏)が発言し、谷口由希子氏がコメントされました。

午後は東海市芸術劇場にて開会式が行われました。そこでは、日本社会福祉学会和気純子会長、東海市長花田勝重氏、第72回秋季大会長で日本福祉大学学長の原田正樹氏が挨拶しました。次の学会賞授賞式において、学術賞は大澤真平氏、木原活信氏が、奨励賞(論文部門)は畠中耕氏が受賞されました。おめでとうございます。

その後は、大会校企画シンポジウムです。「生活不安定層への新たなセーフティネット」をテーマに、中央大学教授の宮本太郎先生の基調講演に続き、コーディネーターの山田壮志郎氏のもと3人の方(石川久仁子氏、垣田裕介氏、川島ゆり子氏)が発言されました。コメンテーターは引き続き、宮本太郎先生にお願いしています。

そして夜は、東海キャンパス生協食堂にて情報交換会を開催しました。123人が参加され、外国からの参加者の挨拶や次期開催校の同志社大学教員の挨拶、本学教員の湯原悦子氏と伊藤文人氏による楽器の生演奏が行われ、大いに盛り上がりました。

2日目は終日、東海キャンパスで開催しました。午前中から午後にかけての口頭発表は157件、ポスター発表は75件、特定課題セッションは3件と、多数の発表がありました。

学術シンポジウムは、索宏氏、藪長千乃氏、梶原浩介氏がコーディネーターを務め、中国からは崔月琴氏、フィンランドからは勝井久代氏、日本からは黒木保博氏が発言されました。

特定課題セッションは、コーディネーターの高木博史氏のもと、「わが国のソーシャルワークは現代政治にどう向き合うのか/向き合ってきたのか」をテーマに行われました。

そして学会企画セッションは、コーディネーターの伊藤嘉余子氏のもと「社会福祉における『つながること』を再考する～『つながり』と『匿名性』～」をテーマに、4人の方(姜恩和氏、掛川直之氏、小澤昭彦氏、松岡是伸氏)が発言し、山縣文治氏がコメントされました。

いずれの企画においても熱い議論が交され、アプローチは異なりますが、現在における社会福祉の本質に迫ることができた機会だったのではないかと考えます。

## 2. 大会校の立場からの所感

本大会の開催にあたり、私達に課せられた最大のミッションは「今後のひな形になる大会運営を行うこと」でした。少子化時代に突入し、以前よりも教員の仕事が忙しくなるなかで、持続可能な大会運営のあり方の確立は喫緊の課題です。かくいう実行委員会のメンバーもかなり多忙でした。本学の70周年事業に位置づけた関係で、大会長は学長、実行委員長の私は社会福祉学部長、それ以外のメンバーもほとんどが大学や大学院執行部で、時間に余裕がある人は一人もいません。

そんなメンバーで準備と運営を行うなかで、「ロケーションの良さ」「有機的連携」「ホスピタリティ」がキーワードとなりましたので、それぞれの観点から所感を述べます。

まず「ロケーションの良さ」です。本学は4キャンパスありますが、今回は名鉄名古屋駅から17分、中部国際空港から20分の東海キャンパスで開催しました。交通の便のみならず、宿泊施設や食事処も豊富という利点がある一方で、私達が日頃使っていない校舎のため細かい部分での勝手かわからず、何度も東海キャンパスや東海市との打ち合わせを行いました。お蔭様で、来校された方々からは「ロケーションが良い」という嬉しいお言葉をいただきました。

次に「有機的連携」です。運営上の最大の特徴は、地元の学術集会サポート会社の(株)ユピアに入ってもらったことです。本学では、2010年度にも秋季大会を行いました。当時とは状況やメンバーが異なり、今回のような大きな大会の開催は初めてに近い感覚でした。どのようなスケジュールで誰がどのように動き、どのような備品を揃えれば良いのかわからないことばかりです。しかし、(株)ユピアの伴走により、無駄がない準備や運営ができました。特に、学生アルバイトを3人の教員が率いるチームに分け、それぞれにタイムスケジュールやマニュアルの詳細を定めて動くことにより、仕事の重複や手持ぶさたな状態をなくしました。このように、外注できる部分は外注するの方向かと思えます。

そして、「ホスピタリティ」です。まず、トラブルがあった際には大会事務局が控える本部に情報が集約され、私達が即座に対応できる仕組みをつりました。小さなアクシデントはいくつかありましたが、幸いにも大きなトラブルは防げました。また、休憩所にはお茶とお菓子を配置し、参加者の方に召し上がっていただいたり、情報交換会で生演奏をしたりと手作り感満載でした。これにより、多額のお金をかけなくても、おもてなしができることを実感する機会になりました。

今後は総合的な総括を行い、翌年の大会校に引き継いでいく予定です。そして、本学会としての「持続可能な大会のあり方」につながれば幸いです。